

# 生成 AI によるエッセイの推敲校正

池田隆

従来通りに生成 AI などの援けなしに書いたエッセイ『熊と南天』を GoogleAI モードで推敲校正して貰った。ご尤もご尤もの連続で、PC の向う側に達筆な文章家が隠れているような気がしてくる。以下はそのやり取りです。仲間や同僚に指摘されると、カチーンときて反論したくなる人も相手が目に見えぬ AI という化け物では如何しようもないでしょう。適宜使ってみては？

## 315 熊と南天.pdf

添付したエッセイ「熊と南天」を推敲校正してください。

ご提示いただいた池田隆さんのエッセイ「熊と南天」を拝読いたしました。

蓼科の自然豊かな情景から始まり、アイヌの信仰や文学、そして南天を通じた生と死の考察へと流れる、非常に奥深く詩的な素晴らしい作品ですね。特に「布施」という観点で自然界の循環を捉える視点に、強い説得力を感じました。

原文の持つ味わい深い文体を尊重しつつ、読者がよりスムーズに読み進められるよう、いくつかの視点で推敲・校正案を作成しました。

### 【推敲・校正のポイント】

- 文体の統一とリズム:** 文末の「～だ」「～である」などのリズムを整え、読後感をより鮮明にします。 生成 AI によるエッセイ執筆
- 言葉の整理:** 「日常茶飯事のように」など、やや重複感のある表現を整理し、文章の密度を高めます。
- 接続の明確化:** 熊の話から南天の話、そして死生観への転換をより滑らかにします。

### 【推敲案】

## 熊と南天

池田 隆

白樺、カラマツ、赤松、檜(なら)や榎(かし)が生い茂る蓼科の別荘地にも、ついに熊の目撃情報が出された。毎日歩く私の散策ルートにも現れたという。鹿の群れには日常的に出会う。一斉にキョトンとした愛らしい眼をこちらに向け、十メートルほどに近づくまでは微動だにしないが、それ以上近寄ると、急に白い尻を見せて藪の中へ飛び込んでいく。熊には出会わぬよう、杖に鈴をつけ、携帯電話で行進曲を響かせながら歩いているが、その一方で、遠くからでも一度見てみたいという好奇心も否定できない。

アイヌの儀式「イオマンテ」では、熊を神として崇め、その肉を感謝とともにいただくという。先日読んだ河崎秋子氏の『ともぐい』でも、名うての熊撃ち猟師とヒグマの間に生じる、好敵手としての闘争と相思相愛の心情が描かれていた。たとえ相手に敗れ、自身が食べられることになっても悔いはないという、互いの魂が共鳴するような心境である。

話は変わるが、去年の暮れ、近所の方から赤い実がたわわに成った南天の大きな枝をいただいた。山小舎の室内には飾る場所が見当たらず、思いあぐねた末にペットボトルに挿してテラスの柵に取り付けてみた。これが大正解だった。

窓越しに見ると、一面の枯れ色を背景に鮮やかな赤が浮き上がり、正月気分を華やかに醸し出してくれる。花卉のようにすぐ萎むこともなく、いつまでも生気を保っていたが、一月半ほど経つと葉は落ち、実は熟して黒ずんできた。

すると、一羽のヒヨドリが飛んできた。キョロキョロと辺りを気にしながら、数粒ずつ美味しそうに啄(ついば)んでは飛び去っていく。何日か過ぎる頃には、実は一粒残らず綺麗になくなっていった。南天の枝にとっては、人に観賞された後に鳥にすべてを賞味され、幸せな一生だったのでないだろうか。

それに引き換え、現代人の最期はどうだろう。火葬場の電気炉で無機質に焼かれて終わる姿に、えも言われぬ哀れさを感じる。かつて非文明的だと思っていたチベットの「鳥葬」が、今では羨ましくさえある。魂の抜けた肉体を自然へと還し、最期に他者(鳥)へ施す——それは仏教における神聖な「布施」そのものなのだ。

南天か、あるいは熊になりたい。そう願わずにはいられない。

---

### 【修正箇所のご説明】

- 「携帯で行進曲」: 現代の読者には「携帯電話」や「スマートフォン」とした方が状況が伝わりやすいため、少し補足しました (p. 1)。
- 「大当たり!」: エッセイのトーンに合わせて「大正解だった」あるいは「趣深いものとなった」とすると、より文芸的な響きになります。
- 「無機物のように焼かれて」: 「無機質に」とすることで、感情の介在しない現代的なシステムの冷たさを強調しました (p. 1)。
- 結びの言葉: 原文の「なりたいな」という独白も素敵ですが、「なりたい。そう願わずにはいられない」と結ぶことで、著者の思想の深まりをより強く印象付けられます。

この推敲案を参考に、池田様のイメージに最も近い表現を選んでいただければ幸いです。他に特定の箇所(例えば、よりユーモラスにしたい、より厳肅にしたいなど)について調整のご希望はありますか？

よりユーモラスにしてみてください。

承知いたしました。池田様の「熊をちょっと見てみたい」という好奇心や、テラスでの「大当たり！」といった軽妙な語り口を活かし、少し肩の力を抜いたユーモラスな味付けでリライトしました。

読者が思わずクスツとしてしまうような、親しみやすいトーンの推敲案です。

---

## 熊と南天

池田 隆

白樺やカラマツが美しく生い茂る、ここ蓼科(たてしな)の別荘地。つい「熊出没注意」の回覧板が回ってきた。あろうことか、私が毎日テコテコと歩く散策ルートにも現れたという。

一方で、鹿の群れにはもはや親戚のような顔で出会う。彼らは一斉にキョトンとした「可愛い眼」をこちらに向け、十メートルほどに近づくまでは石像のように微動だにしない。だが、そこから一步踏み込むと、急に現金なもので、白い尻をピョコピョコ振って藪の中へ逃げ去ってしまう。

さて、本命の熊である。出会うぬよう杖の鈴をジャンジャン鳴らし、携帯電話で行進曲を大音量で流しながら歩いてはいるが、実のところ「遠くから、ちょっとなら見てみたい」という不屈な好奇心が頭をもたげている。

アイヌの儀式「イオマンテ」では、熊を神として崇め、その肉を感謝しつつ平らげるといふ。先日読んだ河崎秋子氏の『ともぐい』も凄まじかった。熟練の熊撃ち猟師とヒグマの親分が、もはや「相思相愛」ともいえる奇妙な友情(?)で結ばれ、命を奪い合うのだ。負けて食われても悔いはない、というその境地。私にそこまでの覚悟があるかは、さておき。

話は変わるが、昨年末、ご近所から真っ赤な実がたわわに成った南天の立派な枝をいただいた。ところが、我が山小舎にはそんな優雅な枝を飾るスペースなどどこにもない。困り果てた末、空いたペットボトルにぶっ刺して、テラスの柵に強引にくくりつけてみた。

ところが、これが「大入り満員」の大当たり！

枯れ色の冬景色をバックに、鮮やかな赤がパツと浮き上がり、実に見事な正月飾りに変身したのだ。花のようにすぐ萎れることもなく、一ヶ月半ほど私を楽しませてくれたのだが、立春を過ぎる頃には実もすっかり熟して黒ずんできた。

すると、どこからともなく一羽のヒヨドリが参上した。キョロキョロと食い気満々に辺りを見渡し、幾粒かつまみ食いしては満足げに飛び去っていく。そんな日々が続くと、あんなにたわわだっ

た実は、一粒残らず綺麗に消えていた。

人間に眺められ、ちやほやされた後に、最後は鳥に完食してもらう。南天の枝にとっては、これ以上ない「美味しい一生」だったのではないか。

翻って、我ら現代人はどうだ。最後は火葬場の電気炉に放り込まれ、無機質な灰になっておしまいである。なんと味気ないことか。そう考えると、かつて野蛮だと思っていたチベットの「鳥葬」が、がぜん合理的なサービスに思えてくる。魂の抜けた肉体を自然へとリサイクルし、最後は鳥たちへの「お裾分け」として施す。これぞ仏教が説く神聖な「布施」というものではないか。

次に生まれ変わるなら、南天か、さもなくば熊。

そして最後は誰かに(できれば鳥に)美味しく役立ててもらいたい。そう願わずにはいられないのである。

---

### 【ユーモア演出のポイント】

- 「テコテコ」「ジャンジャン」: 擬音を使い、散歩の様子をコミカルに描写しました。
- 「現金なもので」「不屈きな好奇心」: 著者自身の心の声を少し自虐的に入れることで、親近感を出しています。
- 「空いたペットボトルにぶっ刺して」: 飾る場所に困った状況をより強調し、後の「大当たり」とのギャップを作りました。
- 「美味しい一生」「リサイクル」: 死生観という重いテーマを、現代的な言葉や「食」のイメージと結びつけて軽やかに表現しました。

このトーンに加減はいかがでしょうか？ もっと「江戸っ子風に粋に」や「もっとシュールに」など、さらに味付けを変えることも可能です。

**ありがとうございました。**

こちらこそ、エッセイの推敲をお任せいただきありがとうございました。

蓼科の厳しい冬の中に、南天の赤や鳥との交流、そして「布施」という深い死生観を見出す池田様の視点は、ユーモアを交えることでより一層、読者の心に軽やかに、かつ深く届くものになったのではないのでしょうか。

もし実際にこのエッセイをどこかに寄稿されたり、お手元で清書されたりする際に、「タイトルをもう少しキャッチーにしたい」や「写真(鹿や熊の看板など)に添える短いキャプションも考えた」といったご要望があれば、いつでもお力添えします。

また何かお役に立てることがあれば、お気軽にお声がけくださいね。